

# 短期交換留学生向けインターンシップ授業における 企業体験者講話とPBL（課題発見解決型学習）

恒松直美

## はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム(HUSA プログラム)<sup>1</sup>留学生向けの授業「HUSA インターンシップ I: キャリア理論と実践」に導入した「企業体験者講話」と講話についての PBL（課題発見解決型学習）<sup>2</sup>協同学習をもとに、その意義と成果について考察する。2010 年度後期（秋学期）より新たに導入した PBL を使用した協同学習は、短期交換留学生と本学学生が、大学教育と仕事・社会とのつながりやキャリア構築と自己実現について共に考察し学ぶ場を創り出した。「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題し、高等教育体験者の意識変容の研究を進める過程で、大学生が社会との接点を切望しつつもその機会が少ない現実と、大学教育と自らの将来との関わりが分からず迷う姿が見えてきた。<sup>3</sup>その研究成果を生かし、学生の要望に応えるべく、大学教育と社会を連携させた支援体制の構築を念頭におき、企業から講師を招聘して社会人の実体験の講話をインターンシップの授業に導入する試みを行った。本稿では、企業体験者講話についての学生の自主的学びを促進する目的で導入した PBL 協同学習による成果を考察し、留学生インターンシップの授業におけるその意義について論じる。

2003 年度の「HUSA インターンシップ」開講より授業の充実化を図るため改善を重ねてきた。「企業体験者講話」及び PBL 協同学習は、社会人の知識と体験についての講話をもとに留学生と本学学生がインタラクションを起こしながら学ぶ新しい形式の授業となった。「HUSA インターンシップ」は、短期交換留学

<sup>1</sup> 以降、「広島大学短期交換留学プログラム」(Hiroshima University Study Abroad Program)を「HUSA プログラム」と称する。また、「広島大学短期交換留学プログラム」に参加した留学生を「HUSA 留学生」と称する。

<sup>2</sup> 「PBL(Problem-based learning)」の日本語訳には、「課題発見解決型学習」、「問題解決型授業」、「問題基盤型学習」、「問題立脚型学習」などがある。本稿では統一して「課題発見解決型学習」を使用する。

<sup>3</sup> 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題して高等教育体験者の意識変容の研究を 2009 年度より進め、日本人学生・留学生・社会人を含め幅広くインタビューを行ってきた。「人の意識」に焦点を当てた質的調査を進める中、学生の思いや迷い、社会人から見た大学教育への見解など、普段あまり聞くことのない大学教育体験者の深い内面を体験者自身の言葉で聞く機会を持てた。高等教育体験者の意識変容の経験について時間的・空間的にホリスティックに捉えつつある。

生が日本社会での実体験を持つことを目的として開講した授業であるが、インターンとして企業や官公庁で就労する体験を持つことに加え、実際に社会で活躍する「企業人」を通じて、仕事の内容やその意義、組織と人との関わり、企業内制度やマーケティングなど、より具体的かつ多角的に仕事について学ぶ場へと発展させてきた。さらに、本学学生にも講話及び協同学習への参加を促し、グローバルな環境で学生が世界と日本について考えながら学べる授業へと発展と転換を図りつつある。PBL を使用した協同学習は、短期交換留学生と本学学生が、将来のキャリアや自己実現について意見交換をしつつ議論を進める異文化間コミュニケーションの場ともなった。大学国際化が掲げられる今日、キャンパスにおける異文化の学生間のインタラクションの機会を増やす対策は急務である。短期交換留学生と本学学生が積極的に意見交換をし、自己実現や仕事の意味を議論し、自主的に課題を発見していく重要性は大きいと考える。

### **「HUSA インターンシップ」（広島大学短期交換留学生向けインターンシップ・コース）の発展の経緯**

2003 年度の「HUSA インターンシップ」開講より、短期交換留学生向けインターンシップの授業を企業からの助言及び学生の要望に基づいて改善してきた。派遣先の地域企業及び広島経済同友会広島中央支部より貴重かつ有益な助言をいただき、地域企業との連携を強化しつつ、より意義のあるインターンシップ制度の構築を目指してきた。「HUSA インターンシップ」の授業を受講し、交換留学プログラム参加修了後帰国して社会人となった留学生の多くが日本と関連した仕事に就く中、それらの留学生へのインタビューでは、インターンシップの意義を強調するケースが多い。学生は就職後も、インターンシップの体験を高く評価し、社会体験を積む中でその価値を再認識し、自己の日本留学の体験を再評価している。<sup>4</sup>

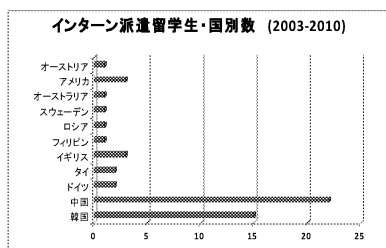
2009 年度より短期交換留学プログラムに参加した留学生へのインタビューを開始したが、そのインタビュー結果及び企業体験者講話後についてのアンケート調査とレポートから、短期交換留学生の多くが日本留学を日本と関連のある仕事につなげたいとの希望を持っている現実が明らかとなった。学生からの要望に少しでも応え、授業の充実化を図る目的で、「HUSA インターンシップ」の授業を、「HUSA インターンシップ I: キャリア理論と実践」、「HUSA インター

---

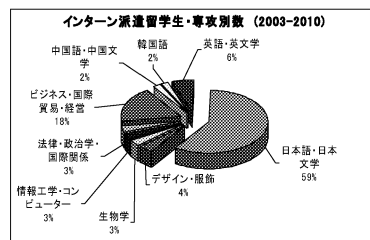
<sup>4</sup> 「HUSA インターンシップ」受講生の帰国後のキャリアについては今後追跡調査を行っていく。

ンシップ II:実習」の2段階に分類して開講することを決定した。インターンとして派遣されてきた HUSA 留学生の国別人数と専攻は以下である。授業の充実化を図る過程で、より幅広い HUSA 留学生がインターンシップの授業に参加しつつある。

HUSAインターンシップ派遣学生（派遣留学生数）



インターン留学生の専攻



大学国際化、グローバル人材育成、産学連携、知識基盤社会が叫ばれ、日々変化するグローバル社会において産業界を取り巻く厳しい経済情勢は大学生の将来への不安を募らせている。産業界から大学に対し、即戦力となる人材育成と教育成果の明示を要望する声は強い。その状況下、自己実現のあり方を模索しつつも、何から始めて良いのか分からない学生は多い。学生が仕事についての具体的知識を増やし、大学教育と実社会との接点を見出し、自己実現に向けて自分探しができる授業へと変革する目的で、2010年度前期より「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」を新しく開講した。授業内容は、実際の電話応対や自己紹介を含む職場での基本的マナーなどの実習に加え、キャリアやインターンシップの意義、仕事をする意味を自主的に考える場を提供することを試みた。

仕事や業種に対する単なる「イメージ」で選択肢を狭めず、実体験や仕事の多面性を学ぶ重要性を、学生も企業体験者講話から学び得ていることが講話についてのアンケート調査から分かった。講話には、同じ業種や職種でも多様な仕事が存在する現実や仕事における「人」の重要性など、普段の大学生活からは学生が知り得ない知識が盛り込まれている。社会における実体験が稀有である学生は、職業について先入観を持っていることが多い。したがって、「社会人」の実話から仕事の意義や仕事の内容及びプロセスについて学び、業種や職種を絞らず幅広く仕事を知る機会を持つことが、学生がより現実的なキャリア選択をしていくことにつながる。

「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」は、「HUSA インターンシップ II：実習」の事前準備の授業として開講し、インターンとして派遣する日本語上級の学生のみでなく、派遣されない日本語中級の学生も受講資格を持つ授業とした。授業で使用される日本語は、日本語中級の留学生には理解が困難なことも多いが、英語による補足的説明を教員が行うことで日本語中級でも理解可能となる。また、企業体験者講話を全学公開にすることで、他の留学生や日本人学生にも講話を聴く機会を広げ、協同学習への参加も促すことができた。多国籍の学生による協同学習プロジェクトでは、英語と日本語を使用し、言語の壁を超えて学生が相互に支援しつつ学ぶ場を持てた。実際の留学生インターンを派遣する「HUSA インターンシップ II：実習」では、インターン受け入れ企業の確保に向けて、自主的な企業登録などのシステムの整備を試みてはいるが、現実的に受け入れ企業側にメリットの少ない短期交換留学生インターンの受け入れを確約する企業は少ない。今後も、担当教員が継続的に企業と連絡を取り、企業を訪問し、絶えずつながりを維持し、協力を呼びかけ続ける努力が必須となる。同時に、企業側にも何らかのメリットのあるシステムの構築が今後の課題である。

### 交換留学生向けインターンシップの授業における PBL 協同学習

PBL は、医学教育における重要な教育法の一つである。患者について生物医学的モデルでの学習に限定せず、多面的に患者の問題に取り組めるよう患者の事例の中から問題を見つけ出す学習方法である（吉田・大西 2004）。2010 年 9 月 21-22 日に広島大学教育室主催で開催された PBL に関する FD（ファカルティ・デベロップメント）<sup>5</sup>に参加し、その成果を授業に生かすべく、2010 年度後期（秋学期）の「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」の授業に PBL(Problem-based learning)（課題発見解決型学習）を導入した。問題を多角的に捉え自主的な学びを促進する PBL は、大学・人・社会の連携を目指す HUSA インターンシップ・コースにおいて、企業体験者講話から学生が自主的に学べる学習方法であると考えられる。HUSA 留学生と他のボランティア学生との協同学習を PBL を使用して行い、大学教育の理論的理解と国際社会での実践を連携させていくことを目標とした。多様な背景を持つ学生間にインタラクションを起こし、積極的に議論を行う授業の発展は本学における課題でもある。

<sup>5</sup> 広島大学教育室「平成 21 年度大学教育推進プログラム(GP)新世代到達目標型教育プログラムの構築」ウェブサイト参照。

吉田・大西（2004）は PBL の中核となる学びとして以下を挙げている。

1) 問題発見能力

2) 自己主導型学習・生涯学習への道筋

- \* 知識伝授の詰め込み教育で得た知識は将来役に立たない（能動学習の重要性）
- \* 自ら進んで積極的に行う方がより満足度が大きい
- \* 学習への動機づけとチャレンジ

3) 情報収集のスキル

4) 科目を統合した知識の習得・多角的アプローチ

- \* 知識が統合される形での学習（講義の一方的に伝えられる学科別の独立した知識と異なる）

5) 対人関係・コミュニケーション能力・協調性の習得

- \* 講義よりグループ討論の方が学生の問題解決能力を向上（協同学習・競争学習・個別学習の比較より）

6) プレゼンテーション技能の習得

7) 「事例」設定により、将来の状況に直結した学習

- \* 知識は何かに関連づけた方が記憶しやすく思い出しやすい

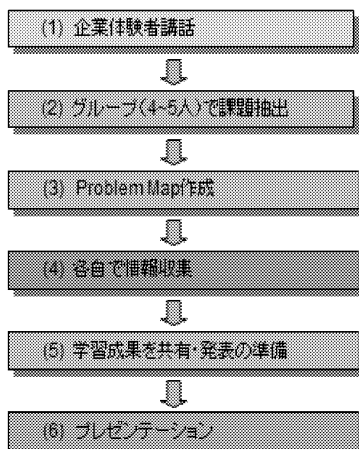
留学生インターンシップに向けた事前準備の授業において PBL を使用した目的は、留学生と本学学生の自主的で積極的な学びを促進し、異文化の背景を持つ学生間のインタラクションを促進することである。PBL を使用した協同学習

を導入した 2010 年度後期（秋学期）の「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」の授業では、企業体験者講話についての協同学習を以下の流れで進めた。

16 回の授業のうち、「企業体験者講話」を全学開講で 3 回開催し、1 回の講話ごとに次週に「PBL 協同学習」を行った。結果、計 6 回の授業を「企業体験者講話＋PBL 協同学習」に費やす授業構成とな

った。他の授業では、キャリア理論の紹介や、インターンとして仕事をこなすうえでの基礎的な儀礼や社会人としてのマナーなどの実践的な研修を行った。今後の改善策として、16 回の授業の流れの中で、各協同学習の間隔をより開け

PBL学習の流れ



るようにスケジュールを組むことが挙げられる。2010 年度後期は、3 回の企業体験者講話が学期の初めの 2 ヶ月に集中する構成となった。講話の間隔を開け、講話の間に教員による実践的研修と講義を挟むことで、学生はより効果的に講話の意義が理解できると考える。講話を行う企業人を見つけるのが簡単ではない現実や、実際の企業講師の仕事上の都合もあり、教員の希望に沿って授業のスケジュールが組めない現実的問題があることは否定できない。

## **PBL 協同学習の流れにおける各段階の取り組み**

### **(1) 企業体験者講話**

「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」は原則として HUSA プログラムに参加した交換留学生のうち日本語中級及び上級の留学生のみ受講可能である。より多くの学生が講話を生かせるよう企業体験者講話を全学開講とし、大学の電子掲示板で全学から参加者を募集した。2010 年度前期（春学期）の「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」より「企業体験者講話」を導入し、さらに、2010 年度後期（秋学期）より、PBL を使用した協同学習を開始した。2010 年度前期の授業には 8 人の HUSA 留学生が受講登録し、授業における 3 回の企業体験者講話には以下の学生が参加した。

#### ■ 第 1 回 「企業人の働くモチベーションとは？」

新田泰生氏（リクルート・マネージメント・ソリューションズ(株)勤務経験）  
参加者：HUSA 留学生 8 人・日本人学生 15 人（合計 23 人）

#### ■ 第 2 回 「持続成長する企業とは？」

小林智彦氏（リクルート・マネージメント・ソリューションズ(株)勤務経験・起業）  
参加者：HUSA 留学生 7 人・日本人学生 8 人（合計 15 人）

#### ■ 第 3 回 「企業と人材～考え方の大切さ～」

山根英幸氏（マツダ(株)勤務経験）  
参加者：HUSA 留学生 8 人・他の留学生 1 人・日本人学生 5 人（合計 14 人）

2010 年度後期（秋学期）の「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」には 14 人の HUSA 留学生が登録し、3 回の講話への参加者は以下であった。講話後は新しく短期交換留学生と他の参加学生との PBL 協同学習を行った。全学開講とした「企業体験者講話」への参加者の中から協同学習への参加希望者を募り、HUSA 留学生と 4~5 人のグループを構成し協同学習を進めた。

#### ■ 第 1 回 「社会の中で働くための就職活動」

齊藤稔夫氏（広島大学・大学院生）

参加者：HUSA 留学生 14 人・日本人学生 5 人・その他留学生 1 人（合計 20 人）

■ 第 2 回 「人は仕事を通して成長する」

新田泰生氏（リクルート・マネージメント・ソリューションズ(株)勤務経験）

参加者：HUSA 留学生 14 人・日本人学生 9 人（合計 23 人）

■ 第 3 回 「逆転の発想で国内旅行を活性化する - ペットツーリズム -」

中村忠司氏（JTB コミュニケーションズ(株)勤務経験）

参加者：HUSA 留学生 13 人・日本人学生 7 人・その他留学生 1 人（合計 21 人）

14 人の HUSA 留学生の国籍・性別と日本語レベルを以下に示した。14 人のうち、日本語中級（レベル 3 または 4）は 2 人、日本語上級（レベル 5）は 12 人であった。

国籍	性別	日本語レベル	人数
中国	女性	上級	8
中国	男性	上級	1
韓国	女性	上級	2
アメリカ	男性	中級	1
イギリス	男性	中級	1
フランス	男性	上級	1

表 1. 2011 年度後期に「HUSA インターンシップ I」を受講した交換留学生(HUSA)の国籍・性別・日本語レベル（受講条件は日本語中級または上級）

より有効的な協同学習が可能となるよう、講話開始前に PBL についての概要説明を配布して簡単に説明し、協同学習の準備として重要な概念についてメモをとるよう学生に指示を出した。PBL 導入前の 2010 年度前期（春学期）の企業体験者講話では感想文の提出を課題とした。感想文からは、留学生が、平素聞くことのない大学外の企業人の実体験を聞いて感銘を受けた様子や社会で働く意味を改めて考える機会となったことが伺えた。2010 年度後期は、感想文の課題に加え、学生が自主的に調査を進める学習へと発展させる目的で PBL を導入したことを踏まえ、重要な概念や課題を考察しつつ講話を聞くよう学生に指示を出した。以下(2)～(6)に示す進行手順は 90 分の企業体験者講話をもとにした時間構成である。

(2) グループ（4~5 人）で課題抽出：次週に向けた各グループの準備

HUSA 留学生 3~4 人と、講話の参加申し込み時に PBL 協同学習への参加登録をした学生 1~2 人とで構成する 4~5 人のグループを教員が事前に構成しておき、講話終了後に学生に伝えた。講話 3 回とも 5~6 人のグループ構成となった。次週の(3)プロブレム・マップ作成のための課題として、各グループで集まりマッ

プ作りに向けてアイデアを出し合い、概念の相関性や類似性などについて議論するよう指導した。さらに、(4)の「各自で情報収集（課題）」の作業の準備として各自の調査項目を決定し事前に調査を行う作業も進めるよう指示をだした。

第1回目のPBL協同学習では、講話を30分とし(4)の各自の調査項目の決定まで教員の指導を受けながら1回の授業で進めた。第2回目からは企業講師を招聘して1回分の授業を講話と質疑応答のみに使用し、(2)の作業を課題として学生が自主的に進め、次の授業では(3)のプロセスから入った。(2)の作業を教員なしで学生のみで課題として進めるのは、PBLを初めて行う学生には理解しにくいことを懸念していたが、学生の意欲は予想以上でどのグループも課題のグループ学習を行い、準備をして次週の(3)プロブレム・マップ作成に臨んだ。実際、マップのアイデアや各自の情報収集のみに終始せず、(5)の情報整理とプレゼンテーションの準備段階まで仕上げ、作業を完了してくるグループもあった。

### (3) プロブレム・マップ作成（講話の次週の授業）

前項で説明したように、模造紙へのマップ作りは90分の講話のある日の授業では行えないため、(2)「グループ（4~5人）で課題抽出」及び「(4)各自で情報収集（課題）」の作業を次回の授業の事前準備の課題とした。第2回目の授業では、事前に議論してきた概念間の関連性について議論しつつ、模造紙に多色のマーカーを使用してマップを作成する作業を行った。留学生とボランティアの参加学生は、自主的に日本語と英語を使用し相互に理解を支援しつつ議論を進めた。学生は教員の指導を待たなくとも積極的にプロジェクトを進める力を持っていることが学生の意欲的取り組みから伺えた。

交換留学生と自主的に参加したボランティア学生が発表の準備に向けて話し合う過程で起こるインタラクションには大変貴重な意味がある。本学の学部レベルのカリキュラムでは留学生と日本人学生が共に受講する授業がまだなく、積極的な異文化間のインタラクションを起こす授業もほとんどない。その現状において、社会人の持つ体験と知識について、多様な価値観を持つ学生が自分の言語能力の限界に挑戦し、相互にコミュニケーションを図りつつ議論する学びは貴重な体験である。世界へと目を向ける動機ともなり、新しい視野から自分の興味とキャリアへの展望を広げる動機付けにもなる。

### (4) 各自で情報収集（課題）

前項で既に述べたように、次週に発展させていく協同学習の準備として、各自が担当する課題を自分なりの方法で調査してくる過程である。「HUSA インタ



ンシップ I: キャリア理論と実践」を受講している交換留学生は、大多数が学部生であり、自分で課題を設定して調査し、まとめた結果を日本語でプレゼンテーションする経験は少ない。したがって、必要な情報を日本語で検索し整理して提示する訓練となる。この作業を外国語である日本語で日本留学中に行う経験は貴重である。実際、留学生は回を重ねるごとにプレゼンテーション能力を高めていった。

学生に情報収集について指導する上で注意すべきことは、情報の妥当性を判断する力をつけることである。インターネットで簡単に情報収集が可能となった現在、インターネット上の情報の妥当性や正当性を吟味せず学生が使用するケースが多い。実際、学生が「インターンシップ I」の授業で提出した小論文には、情報の妥当性の判断や執筆方法についての教員の指導が不可欠であった。学生が行うプレゼンテーションや論文の執筆については、情報の妥当性の判断の方法や、情報源を明示する必要性などを指導することが必須である。指導がない場合、学生はインターネット上で得られた情報をそのまま発表する形式になりがちで、正しい情報を見極める力や正しい情報の提示の仕方を習得することができない。

(⇒) 「(3) プロブレム・マップ作成」へ)

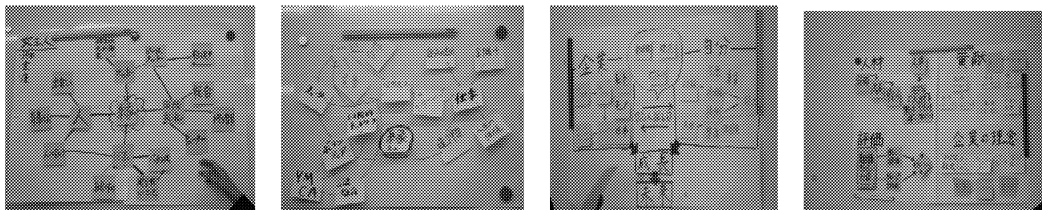


図 1. 「プロブレム・マップ」作成例

第 1 回 「社会の中で働くための就職活動」 斉藤稔夫氏 (広島大学・大学院生) (左 2 枚)  
第 2 回 「人は仕事を通して成長する」 新田泰生氏 (企業勤務経験) (右 2 枚)

### (5) 学習成果を共有・発表の準備

各自の調査内容やアイデアをグループで出し合い、皆で情報を共有し、プレゼンテーションに向けて要点を要約して整理していく。この学習成果の共有と発表の準備段階においても、留学生は自らの日本語能力の限界に挑戦し、試行錯誤して用語を調べ、相互に支援し合っていた。日本語上級の留学生にとっても、企業体験者の講話から抽出する社会や企業についての概念は新しく難解なものが多い。知識を共有し、相互に支援しながら新しい概念を説明できるレベルに引き上げていく体験は、学習意欲を高め能力を伸ばす機会となる。

日本語中級の学生にとり、企業体験者講話の日本語はかなり難解であり、理解力は50%~70%であると述べているが、自らの日本語力の限界に挑むことで実際に日本語力を伸ばしている。協同学習では、学生は、日本語で理解が困難な場合には英語も使用してコミュニケーションを図り、自らの持つ言語能力を駆使して意思の疎通を図る重要性を体験する。実際の生活においても、異文化間のコミュニケーションで双方が共通言語を完璧に習得していることは稀であり、学習段階における現実的体験が実生活での行動に与える影響は大きいと考える。

## (6) プレゼンテーション

企業体験者の講話に基づくプレゼンテーションで必要とされる日本語能力のレベルはかなり高い。日常会話レベルの日本語力では対応不可能であり、学生は企業社会で使用する新しい概念を受動的でなく能動的に使用する場を体験する。さらに、普段は理論的な学習で終わりがちな敬語を「発表」という公の場で使用する体験を持つ。日本語中級の学生にはこのハードルはかなり高いが、敢えて挑戦することで自らの日本語力の限界を引き延ばし、プレゼンテーションが可能であるとの自信につながられる。不自然な表現については教員が助言を加え補助的に発表を支援することにより、プレゼンテーションは実際に可能となる。学生は今後努力を重ねれば日本語でのプレゼンテーションは現実的に可能であるとの実感を持つ。

「HUSA インターンシップ」では、完璧を目指さず、実体験を通じて次の一歩を踏み出したいと学生が思える場の創出を授業の指針としている。全学公開セミナー及び協同学習を通じ、本学の他の学生も「HUSA インターンシップ I」の授業に参加し、留学生の日本語によるプレゼンテーションや活発な質疑応答の場を共に体験できる授業にした。正規学生は、学部レベルでは、留学生との協同授業の機会が少なく、留学生の日本語力さえ知る機会もあまりない。その現状において、インターンとしての派遣に向けて留学生が日本語で積極的に発言し奮闘する場の観察は刺激を与える。留学生の日本語能力やプレゼンテーション能力に驚く日本人学生は少なくない。学部生は、英語で行われる授業を留学生と受講する機会も少ないため、留学生が英語で意見を述べる場に参加することも貴重な体験となる。<sup>6</sup>異文化間のインタラクションが活発に行われる授業

---

<sup>6</sup> 広島大学の学部生が、本学において英語で行われるアカデミックなセミナーに参加できる場として INU(International Network of Universities)セミナーがある。2006 年度に開始され、広島大学にて毎年8月初旬に INU 加盟大学の学生が平和問題についてのディスカッションやワークショップ、模擬国連に参加し、“Global Citizenship”について討議する貴重な国際教育の場となっている。詳細は INU ホームページ([www.inunis.net](http://www.inunis.net))参照。

で積極的に発言したり、グループで意見交換をし協同学習する体験をしていない学生も多く、学生がグローバル社会に向き合えるような現実的な対応策は急務であろう。<sup>7</sup>

## **PBL が交換留学生インターンシップの授業にもたらす効果**

前項において「HUSA インターンシップ I」の授業で実施している企業体験者講話についての協同学習で PBL を使用するプロセスと実施結果について考察してきた。PBL を導入した意義については以下に集約できる。

### **1) 自己発見・将来の展望・自己実現**

＊「自分」の大学での学びと実社会のつながりの発見

＊ 仕事の意味を考察し、自主的に学習課題を発見

高等教育体験者の意識変容のインタビュー<sup>8</sup>では、多くの学生が大学教育と将来との関連性をつかめず将来への迷いを語る姿があった。社会人との接触を希望しつつも、社会との接点の作り方が分からない、大学教育と卒業後の人生のつながりが分からない、といった意見は多い。また、現在仕事を持つ人の考えや体験を聞く機会が少なく、自分は実際に何をしたいのか、そして何ができるのかがつかめない学生が多かった。これらの学生の心情を鑑み、協同学習では、学生が、企業体験者講話から概念を抽出する過程で、具体的に大学教育と社会とのつながりを発見できる授業を目指した。自分と関連づけて課題を発見する目標設定をして講話を聴くことは自主的な学びをもたらすと考える。

### **2) グローバルな視野からの知見**

＊キャリア・仕事・日本企業とグローバル社会について考察

＊異なる価値感を持つ多国籍の学生が多角的に講話を考察

＊大学教育・日本社会・世界とのつながりの発見

多国籍の留学生が参加する協同学習は、国の枠を超えた枠組みからの考察をもたらす。学生は価値感の相違による見解や認識の仕方の違いを協同学習のインタラクションにおいて体感する。企業が現在グローバルに事業展開をする中、社会に出た後、国境を超えて仕事を開拓したり、異文化の人と議論する状況に

---

<sup>7</sup> 例えば、筆者が 2003 年度より広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生向けに英語で開講している授業“Japanese Society and Gender Issues”にて行っているディベート（討論）に参加を希望する日本人学生のボランティアを募集した際、参加希望を申し出た学生は 2~3 名であった。

<sup>8</sup> 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」の研究の一環である(p.47 参照)。

直面する可能性は大いにあり、大学時代に視野を広げる体験は必須である。大学教育で多国籍の留学生とインタラクションを持ち積極的に意見交換する経験が社会に出て学生の行動に与える影響は大きいと考える。

### 3) 能力・技能の習得

- \* 統合的知識から講話の内容を捉える
- \* 情報収集のスキル・方法の習得とその妥当性の判断力を養う
- \* 議論・プレゼンテーションできる日本語能力の習得
- \* 制限時間内に要点をまとめプレゼンテーションする力をつける

急速に変動するグローバル社会において、自分で調査項目を設定して考察し、対処方法を見つける力をつけることは必須である。専門分野のみに固執せず、事象を多角的に把握し統合的に分析する能力が今後は必要となる。さらに、実社会では「人」とコミュニケーションを図る能力が不可欠であり、グローバル時代を生き抜くためには異文化の人々とコミュニケーションできる能力が求められる。多様な専門分野と文化的背景を持つ学生が多角的に意見を出し合う協同学習の場への参加による刺激は学生自身が指摘している。

制限時間内にグループで要点を整理し的確にまとめて発表する能力の習得も、現実的に時間に制限のある企業等での対応や仕事の処理能力に直結するものである。今回、プレゼンテーションの準備とプレゼンテーションに時間制限を設定し、限られた時間を有効活用し協力してまとめる重要性を学生が体験できるようにした。学生は、企業の戦略、マネジメント、人材育成など、企業と関連した新しい領域での知識を吸収すると同時に、その知識を発表する能力を習得する。日本語によるプレゼンテーション能力の習得は、日本留学の成果として自信にもなり、日本の大学へ留学した意義を高めるものである。

「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」及び「HUSA インターンシップ II：実習」は、学生の総合的な力が試される場である。「専門教育」「教養教育」「実践」を統合した学生の知識と能力が必要とされる。文献や講義における理論的な理解を一步進め、それを実体験で総合的に試す場である。これまで習得してきた日本社会・日本文化についての統合した知識を最大限に生かし、異文化である日本企業において、実際に「人」と交わり、行動し、仕事をする試みである。例えば、草原(2010: 49-102)は、教養は単に知識のみをさすのではなく、その人のものの考え方や精神性をも表し、その人の品性や人格形成に関わるような知識も含めた幅広い概念を指し、人間的魅力を形成するもとなると論じている。現実の人生や社会の問題と深い関わりを持った知識、自分自身の思考や体験と結びついた知識が教養であり、グローバル化時代においては、

地球的視野で社会の中で互いに関わりを持つ存在として、自分を取り巻く時間的・空間的関わりを理解する重要性を説く。この指摘は、大学教育の成果(learning outcome)や大学の存在価値についての根源的問い、そして大学教育は何を目指し何を社会にもたらし得るのかの問いに迫るものである。「HUSA インターンシップ」は、「人」として交換留学生が異文化圏の日本社会との関わりを体験する機会であり、その生きた体験は自らの大学教育と日本留学の貴重な成果でもある。

### **結語：グローバル・キャンパス構想とグローバル・リーダー育成に向けて**

「HUSA インターンシップ I: キャリア理論と実践」において、短期交換留学生と他の学生とが協同学習する場を設けたことは、学部レベルであり留学生と接触する機会の無い学生に新しい国際教育の場をもたらした。現時点では、正式に授業を受講し単位を取得している「HUSA 留学生」以外の学生は、ボランティアとして協同学習に参加している。参加した日本人学生は、学部レベルでは留学生との協同授業がほとんどないため、単位が取得不可能でも、留学生と授業を受講できる場への参加を希望していることが認識できた。

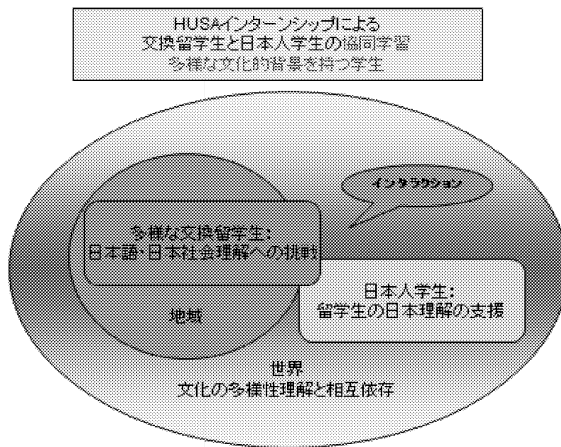
全学公開の企業体験者講話と協同学習を実施する過程で、留学生と交流した経験がなく不慣れな学生に対しての配慮が必要なことも認識できた。HUSA 留学生向けの「HUSA インターンシップ I」の授業の一環である「企業体験者の講話」を全学公開として学内電子掲示板で募集し、次週の HUSA 留学生との協同学習の参加者を募集した際、興味のある学生は即申し込むと推測していた。しかし、実際に留学生や先生と面識がなく、これまで国際交流などの体験がない学生は、留学生向けの講話への参加や協同学習への申し込みは、かなり躊躇することが学生との対話で理解できた。「参加可能」なだけでは、留学生との接触に慣れていない学生は、その場に一人で足を運ぶまでには至りにくい。<sup>9</sup>したがって、興味を持ちながらも躊躇している学生が参加しやすくする配慮が必要となる。例えば講話への参加ポスターに「英語と日本語使用」、「英語が話せなくても参加可能」など、気軽に参加できるようにする配慮である。また、講話参加について学生が連絡してきた際、担当教員から協同学習への参加を奨励すると、学生は講話のみでなく協同学習まで参加する態度に変わる。

グローバル・キャンパスは、大学に在籍する学生の関わり合いをもとに発展し、大学に関わる人が共に創るものである。実際に「人」と出会える学びの場

---

<sup>9</sup> P.57 脚注 7 参照。

であってこそ、学生が大学のキャンパスに足を運ぶ意味が生まれる。知識基盤社会と言われる今日、インターネットや情報伝達の目覚ましい発展と共に実際に人に会う形態のコミュニケーションの機会が減少している。インターネットによる情報伝達の速度と有効性は多くの恩恵をもたらし、判断能力と選択能力を備えていれば、国境を超えて有効的に知識や情報が取得可能となった。しかし、実際に国を超えて相互に理解を深めコミュニケーションを図れる人が増えたかどうかは別の次元の問題である。



グローバル・キャンパスを共に創るためには「人」の力が不可欠である。学生へのインタビューから、自分の歩みたい道が分からず、自分の道を模索する現実的姿が浮き彫りとなった。思い悩み大学教育を受ける意味を失いかけている学生にも何人か会った。HUSA 留学生でよくあるケースは、

「HUSA インターンシップ」を受講した学生も含め、日本社会との接点を求めながらも、留学生という立場で「日本社会」へどうアプローチしてよいか分からないケースである。学生は、大学教育の延長線上に自分が将来出ていく大学外の社会をおき、大学から社会へとビジョンを広げようとしている。そのために、学生の枠を超えて多様な人々と接し、視野を拡大したいと望むケースは多い。そのビジョンが明確に見えず、将来への迷いと不安を抱く姿は、留学生も日本人学生も同様であり、学部生か大学院生かを問わない。

「グローバル人材」育成が大学教育の目標として掲げられる現在、それが何なのか、自分は具体的に何をすればいいのかが学生にはつかみにくいのである。大学外の世界が把握しにくく、インターネットで情報が氾濫する中、学生にとり、「グローバル社会」や「グローバル人材」は自分とは異なる世界の言葉に聞こえているようにさえ思われた。大学教育において、大学外の世界やグローバル社会を人との接触を通じて実際に体感できて初めて学生には「グローバル社会」の意味が認識できる。その手がかりを提供し、大学教育と実社会とのつながりを少しでも学生が感じることができるよう、「HUSA インターンシップ」の

授業に PBL 協同学習を導入してみた。

産業界の視点から学生を捉えがちな「人材育成」の議論から少し離れ、大学教育を見つめる「学生の視点」にシフトし、一人の「人」として学生が自らの思いを言葉で表現し語る姿に耳を傾けた時、社会における自らの価値とその表現方法を探し求める「人」の姿がある。学生は自らを「人材」と捉えてはいない。「人材」は産業界との関連から捉えた「人」の一側面であり、経済的自立と経済的有効性の側面における学生のアイデンティティの一つである。その重要性は否定できないが、「人」としての学生はより大きな枠組みで捉える必要がある。学生は、自分の存在価値を探し、自分と世界の人々とのつながりと自らの道を探す「主体」を持つ「人」である。「グローバル人材育成」が注目される中、「人」として国の枠を超えて様々な人々と接し向き合う意義を再考することが真のグローバル・リーダー育成につながると考える。高等教育体験者の意識変容の研究から見えてきたのは、学生が、人間としてどう生きるべきかに真剣に向き合う姿である。日本人学生を始め、留学生や社会人を含む多くの学生との対話から常に見えたのは、一人の「人」が自らの生きる道を探す姿であった。企業体験者講話に基づいて学生が PBL 協同学習でまとめたマップには、「自己理解」・「成長」・「人生の価値」・「やりがい」・「縁」・「潜在的な能力」・「チームワーク」・「人的資源」・「人事制度」といった「人」を取り巻く概念が重要な位置づけを占めていた。その見解が、学生の解釈によるものなのか、それとも講話者自身が仕事における人の重要性を説いた結果であるのかについては、今後の考察の課題としたい。講話者も学生も「人」に着目している点は確かである。

## 参考文献

草原克豪 2010 「大学の危機-日本は21世紀の人材を養成しているか-」 弘文堂

吉田一郎・大西弘高編著 2004 「実践 PBL チュートリアルガイド」 南山堂

広島大学教育室 2009 「平成 21 年度大学教育推進プログラム(GP)新世代到達

目標型教育プログラムの構築」 <http://home.hiroshima-u.ac.jp/hipro/index.html>

(2011 年 2 月 10 日閲覧)

International Network of Universities (INU) ホームページ 2011 [www.inunis.net](http://www.inunis.net)

(2011 年 2 月 10 日閲覧)

## 謝辞

本研究は「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」(研究代表者 恒松直美・文部科学省科学研究費 2009-2011 基盤 C21530881) の一環として進めている。